

学位論文要旨

現代日本青年における否定的アイデンティティの
心理社会的特徴と発達

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 心理学分野

D166100

日原 尚吾

目 次

第 1 章 本研究の背景と目的

第 1 節 アイデンティティ発達研究の問題点

第 2 節 否定的アイデンティティ

第 3 節 否定的アイデンティティと現代青年の発達的問題

第 4 節 否定的アイデンティティ者のアイデンティティ形成の 取り組み

第 5 節 本研究の目的

第 2 章 否定的アイデンティティ者の抽出手続きの開発

第 1 節 量的データを用いた検討

第 2 節 質的データを用いた検討

第 3 章 否定的アイデンティティ者の発達的問題

第 1 節 否定的アイデンティティと問題のある信念の関連

第 2 節 否定的アイデンティティと不適応の縦断的関連

第 4 章 否定的アイデンティティとアイデンティティ形成の取り組みの 縦断的関連

第 5 章 総合的考察

第 1 節 本研究の成果

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

引用文献

第1章 本研究の背景と目的

第1節 アイデンティティ発達研究の問題点

アイデンティティとは、自分がどのような人間で、社会の中で何をし
てどう生きるかに関する自覚であり、青年期に形成される(Erikson, 1968)。
青年は、児童期までに両親など様々な他者への同一化を通して構成した
自己像や目標などの自己の要素を、自分の資質や今後参入する大人社会
の期待とすり合わせながら統合し、アイデンティティを発達させる。

アイデンティティを構成する自己の要素は、社会で一定程度共有され
た肯定的・否定的なイメージ (e.g., 道徳的—背徳的, 健康的—病的) に
対応する価値 (valence: i.e., 肯定, 中性, 否定) を持つ。例えば, 否定的
な自己の要素には, 社会的に望ましくない性格的・身体的特徴, 社会的
疎外, 他者や社会への反抗的特性, 社会的に望ましくないラベルの取入
れ, 低い能力・自己価値などが含まれる (e.g., Way & Rogers, 2015)。

Erikson (1968) は, こうした肯定的・否定的要素は様々な形で個人内
に共存しており, 両者のバランスに着目する必要があると主張した。つ
まり, 自己の肯定的・否定的な要素をいかなるバランスで統合するかに
よって, 個人のアイデンティティの全体的な価値が規定される。一般に
青年は, 肯定的な自己の要素を積極的に取り入れ, 否定的な自己の要素
を排除することで, 全体的に肯定的な価値を持つ肯定的アイデンティテ
ィを形成する。肯定的アイデンティティは, 社会に受け入れられている
自覚をもたらすと同時に社会からも望ましいとみなされ, 青年期以降の
健全な発達を主導する指針となる (Montgomery, Hernandez, & Ferrer-
Wreder, 2008)。肯定的アイデンティティを形成できない深刻なつまずき
として, 肯定的要素を排除して否定的要素を選択的に取り入れ, 全体的
に否定的な価値を持つ否定的アイデンティティを形成する場合もある。

否定的アイデンティティは否定的要素に偏って構成されるため、その後の発達を否定的な方向へ主導する指針となり、様々な不適応につながると想定される (Montgomery et al., 2008)。

アイデンティティ発達に関する実証研究の問題点は、アイデンティティが肯定的・否定的要素の両方で規定されることを看過してきたことである。多くの先行研究は、アイデンティティ発達を肯定的要素のみに着目して把握し、肯定的要素の欠如が不適応につながること示してきた (e.g., Meeus, 2018)。しかし、肯定的要素の欠如に着目するだけでは否定的要素を多く取り入れているかどうかは分からないため、否定的アイデンティティを十分に理解できない。肯定的・否定的要素の両方に着目し否定的アイデンティティを検討することで、人生を望ましくない方向へ主導するために不適応に陥る者を理解でき、アイデンティティ発達上で陥るつまずきに関する知見を拡張することができる。

第2節 否定的アイデンティティ

否定的アイデンティティは、社会的に望ましくない否定的な要素を多く取り入れ、肯定的な要素を排除して構成される自己に関する全体的自覚である (Erikson, 1968)。否定的アイデンティティ者は、自分が一般社会の期待に照らして望ましくないという自覚を有しており、自分が特定の集団 (e.g., 暴力団) で機能する役割を持つと考える者と、そうした役割意識を持たない者 (e.g., 社会的落伍者) を含む。なお、社会的少数性や辺縁性に積極的な意味を見出し、一般社会の価値こそが間違っているとして自身の正当性を主張する対抗的アイデンティティとは、概念的に区別される (福島, 1979)。

Erikson (1968) は、漸成発達理論において、否定的アイデンティティを第Ⅲ段階「主体性 対 罪悪感」の葛藤の青年期での表れと位置づけて

いる。青年期において、児童期までの自己像が揺らぐアイデンティティ危機が深刻化し苦悩が強まると、大人社会の期待を取り入れながら自己の肯定的要素と否定的要素を適切なバランスで保持することが難しくなる。この際、選択可能な自己の否定的要素を集め全体的に悪い人間になることで主体性を発揮すると、否定的アイデンティティが形成されると想定されている。その背景には、肯定的な自己の要素を保持できないことへの罪悪感と、自己の根源的価値さえ揺らぐ基本的信頼の喪失がある。

第3節 否定的アイデンティティと現代青年の発達的問題

現代日本の青年は、否定的アイデンティティの形成に繋がる危険のある複数の特徴を備えている。例えば、経済不況や雇用の不安定性などの社会状況を背景として、アイデンティティ形成につまずく状態を長期化する者が多く（約60%; Hatano & Sugimura, 2017）、強い苦悩を抱えている（Berman, You, Schwartz, Teo, & Mochizuki, 2011）。また、社会的格差を背景として「負け組」「ニート」「社会的不適合者」など社会的に望ましくない役割が明確に示され、それが青年に押し付けられたり、選択可能な自己の否定的要素として手掛かりにされたりしている（山田, 2004）。

否定的アイデンティティは、現代青年が陥る様々な発達的問題の理解に有用な視点を提供すると考えられる。否定的アイデンティティ者は、社会的に望ましくない人間であることの表明として、社会を「敵と味方」など明確に分割し（i.e., 二分法的信念）、自分を理解する特定の他者や集団以外の社会に不信と敵意を向けるなど社会に対する問題のある信念を持つと考えられている（Hoare, 2013）。また、社会的期待に沿わない行動をして生きることの表明として、非行や攻撃行動など他者との関係性に問題を生じる外在化問題（e.g., 村山他, 2015; Silverstein, 1994）、自殺（Chandler & Proulx, 2006）、引きこもり（三好, 2014）等の不適応に陥りや

すいと想定されている。先行研究は、非行や犯罪などの発達的問題を示した青年の語りを分析し、否定的アイデンティティがこうした発達の問題に結びつく可能性を理論的に指摘してきた (e.g., Solomontos-Kountouri & Hatzitofi, 2016)。しかし、否定的アイデンティティ者を抽出し、彼らが社会に対する問題のある信念と不適応を示すかどうかについて実証的知見を提供した研究は存在しないため、本研究で検討を行う。

第4節 否定的アイデンティティ者のアイデンティティ形成の取り組み

本研究では、否定的アイデンティティ者がアイデンティティ形成にどのように取り組んでいるのかについても検討する。アイデンティティは、自分の生き方について選択肢を探す「探求」と、選択肢を決め傾倒する「コミットメント」に取り組むことで形成される。また、一度アイデンティティが形成されても、その背後では常にアイデンティティ形成の取り組みが進み、それによってアイデンティティが継続的に維持・修正される (Bogaerts et al., 2019)。否定的アイデンティティがアイデンティティ形成への取り組み (探求・コミットメント) とどのように相互関連するのかを縦断的に検討することで、否定的アイデンティティがアイデンティティ形成への取り組み方のどこにつまずくことで形成され、後の不適切な取り組みにどう陥るのかを明らかにできる。それによって、否定的アイデンティティ者を理解・支援していくための示唆を得られる。

この検討はアイデンティティ発達を包括的に把握するうえでも重要である。先行研究の多くは、アイデンティティ発達を、アイデンティティ形成への取り組み方の側面 (アイデンティティをどのように形成するか) から捉えてきた (Meeus, 2018)。一方、否定的アイデンティティは、アイデンティティの内容の側面 (どのようなアイデンティティか) から捉えたものである (Gallagher, McLean, & Syed, 2017)。アイデンティティ

形成への取り組みとアイデンティティの内容がどのように関連しながら進むのかを検討することで、取り組みと内容の両側面を含めたアイデンティティ発達の包括的理解を得ることができる。しかし従来、否定的アイデンティティとアイデンティティ形成への取り組みの縦断的関連は明らかにされていないため、本研究で検討を行う。

第 5 節 本研究の目的

本研究では、これまで実証的に検討されていない否定的アイデンティティの観点を導入し、現代日本青年の発達的問題との関連性を明らかにするとともに、アイデンティティ発達を包括的に理解することを目的とする。研究 1 では、否定的アイデンティティ者の抽出手続きを開発し、量的・質的データから妥当性を検討する。研究 2 では、否定的アイデンティティと社会に対する問題のある信念の関連を検討する。研究 3 では、否定的アイデンティティと多様な不適応の縦断的関連を検討する。研究 4 では、否定的アイデンティティとアイデンティティの探求・コミットメントの縦断的関連を検討する。

第 2 章 否定的アイデンティティ者の抽出手続きの開発

第 1 節 量的データを用いた検討

本研究では、否定的アイデンティティ者を抽出するのに適したアプローチとして、20 個の『私は、…』に自由に回答させる 20 答法 (Kuhn & McPartland, 1954) を採用した。20 答法は、個人が主体的に表出する自己概念の内容の偏りに着目し、そこから何がその個人のアイデンティティを基礎づけているかを把握するために使用されてきた (e.g., Rhee, Uleman, Lee, & Roman, 1995)。20 答法の肯定的内容と否定的内容のバランスの偏りに着目することで、その個人のアイデンティティが肯定・否定のどちらの自己の要素に基礎づけられているのかを把握し、否定的ア

アイデンティティ者を抽出できると考えられる。具体的には、否定的アイデンティティ者は、社会的に望ましくない否定的記述の割合が多く、肯定的記述の割合が少ない特徴を持つと考えられる (Erikson, 1968)。

Erikson (1968) の理論から、否定的アイデンティティ者は自分自身や自分の生き方が明確で社会に受け入れられている自覚であるアイデンティティの感覚と基本的信頼感が低く、罪悪感が高いと予測する (調査 1)。また、職業世界の情報を収集する環境探索を行いにくく、職業決定に苦悩して行き詰まる職業混乱が高いと予測する (調査 2)。

方法

対象者と手続き 調査 1 では大学生 218 名 (女性 136 名; 年齢 18–29 歳, 平均年齢 20.6 歳), 調査 2 では大学生 190 名 (女性 113 名; 年齢 18–26 歳, 平均年齢 20.6 歳) に質問紙調査を行った。

質問紙構成 調査 1 では、20 答法, アイデンティティ (Ochse & Plug, 1986; 7 項目, 4 件法; $\alpha = .71$), 罪悪感 (大西, 2008; 7 項目, 5 件法; $\alpha = .92$), 基本的信頼感 (Ochse & Plug, 1986; 7 項目, 4 件法; $\alpha = .78$) を使用した。調査 2 では、20 答法, キャリア探索 (安達, 2008) の環境探索 (7 項目, 5 件法; $\alpha = .82$) と自己探索 (6 項目, 5 件法; $\alpha = .81$), 職業混乱 (下山, 1986; 8 項目, 5 件法; $\alpha = .81$) を使用した。

20 答法の分類 先行研究における 20 答法の分類基準と、否定的アイデンティティに関する記述 (e.g., Erikson, 1968) から分類基準を作成し、肯定、否定、中性の 3 つのカテゴリに記述を分類した (Table 1)。分類評定の一一致率は十分だった ($\kappa = .78-.82$)。

対象者の分類 各対象者について、記述全体に対する肯定・否定カテゴリの割合を算出し、それぞれを平均と比較して、3 つのアイデンティティの価値の群に分類した。これまでの否定的アイデンティティ研究で

Table 1
20答法の分類内容と記述例

カテゴリ	分類の種類	記述例
肯定	社会的に望ましい性格的・身体的特徴 他者との良好な関係性 他者や社会に貢献しようとする特徴 社会的に望ましいラベルの取り入れ 高い能力・自己価値	私はいつも元気だ 私は家族と仲がいい 私は他人の助けになる仕事に就きたい 私はボランティアグループの一員である 私は楽器の演奏が上手い
否定	社会的に望ましくない性格的・身体的特徴 他者との悪い関係性, 疎外 他者や社会に対する反抗的な特徴 社会的に望ましくないラベルの取り入れ 低い能力・自己価値	私は不細工だ 私は皆に嫌われている 私は日本人が嫌いだ 私は負け組だ 私は頭が悪い
中性	明らかに肯定的とも否定的とも判断できない, またはどちらとも判断できる, 性格・身体的特徴 明らかに肯定的とも否定的とも判断できない, またはどちらとも判断できる, 好み・趣味 明らかに肯定的とも否定的とも判断できない, またはどちらとも判断できる, 行動・態度 明らかに肯定的とも否定的とも判断できない, またはどちらとも判断できる, 願望 明らかに高いとも低いとも判断できない, またはどちらとも判断できる, 能力・自己価値 明らかに良いとも悪いとも判断できない, またはどちらとも判断できる, 他者との関係性 現在の状況 自分の名前	私は髪が短い 私は白米が好きだ 私はバス通学をしている 私は車が欲しい 私は平均的な成績だ 私は末っ子だ 私はお腹がすいている 私は〇〇(本名)だ

注目されてきた深刻なレベルだけでなく、比較的軽微なレベルまで含めて否定的アイデンティティを把握できるように、本研究では平均値を基準とした。肯定カテゴリの割合が平均より高く否定的カテゴリの割合が平均以下の対象者を肯定群（調査1は24.3%、調査2は18.4%）、肯定カテゴリの割合が平均以下で否定的カテゴリの割合が平均より高い対象者を否定群（調査1は21.6%、調査2は27.9%）、肯定・否定カテゴリの割合がどちらも平均より高い、またはどちらも平均以下の対象者をバランス群に分類した（調査1は54.1%、調査2は53.7%）。

結果と考察

アイデンティティの価値の群を独立変数、アイデンティティ、罪悪感、基本的信頼感、環境探索、自己探索、職業混乱を従属変数とする分散分析を行った。アイデンティティ ($F(2, 215) = 6.92, p < .001, \eta_p^2 = .06$), 罪悪感 ($F(2, 215) = 12.16, p < .001, \eta_p^2 = .10$), 基本的信頼感 ($F(2, 215) = 15.83, p < .001, \eta_p^2 = .13$), 環境探索 ($F(2, 187) = 6.20, p = .002, \eta_p^2 = .06$), 職業混乱 ($F(2, 187) = 6.39, p = .002, \eta_p^2 = .06$) でアイデンティ

ティの価値の群の主効果が示された。下位検定の結果、アイデンティティ、基本的信頼感、環境探索は否定群で最も低く、罪悪感と職業混乱は否定群で最も高かった。以上の結果は予測と一致し、心理的指標および職業に関する指標との関連から本抽出手続きの妥当性が支持された。

第 2 節 質的データを用いた検討

研究 1-2 では、量的データによる確認が困難な側面についての妥当性検証を、面接調査による質的データを用いて行う。否定的アイデンティティは、児童期までの自己像が揺らぐアイデンティティ危機に対処する過程で、将来参入する大人社会の期待を参照しながら形成される全体的な自己の自覚である。その点で、大人社会への参入を特に意識していない児童期までの否定的自己像とは質的に異なる (McLean & Syed, 2015b)。否定群の対象者は、今後参入する大人社会において全体的に望ましくなく、受け入れられないという明確な自覚を持つと予測する (Lewis Arango, Kurtines, Montgomery, & Ritchie, 2008)。また、そうした自覚が Erikson の理論で想定される 3 つの背景要因 (i.e., アイデンティティ危機の深刻化、罪悪感、基本的信頼の喪失) に根差していると予測する。

方法

対象者と手続き 研究 1-1 の調査 1 の参加者のうち、面接調査に協力を得られた 22 名に対して半構造化面接を実施した (女性 17 名)。内訳は、肯定群 4 名、否定群 5 名、バランス群 13 名であった。

質問項目 ①これから踏み出していく大人社会において自分が受け入れられる人間かどうかに関する全体的な感覚、②そのように考える理由とそう思うようになったプロセスを詳しく尋ねる質問項目を設定した。

結果と考察

まず、自分が大人社会に受け入れられない明確な自覚を持つかどうか

確認した。次に、その自覚を持つに至った理由を時系列に沿って整理した。具体的には、語りの共通性をまとめる理論的テーマティック・アナリシス (Braun & Clarke, 2006) を用いて、①アイデンティティ危機の深刻化 (青年期に入って自己像が揺らぎ苦悩すること)、②罪悪感 (自分が社会的期待に沿わない人間であるという感覚)、③基本的信頼の喪失 (自己価値の全面的な否定や他者への全面的な疑いに陥ること) のテーマを抽出し、否定群、肯定群、バランス群の回答の質的相違を検討した。

否定群の 5 名全員が、「(社会には) 受け入れられない」など、大人社会で自己が全体的に望ましくない人間であるという主観的感覚を明確に語っていた。また、否定群の 5 名全員がアイデンティティ危機の深刻化について語り、うち 4 名で、アイデンティティ危機が罪悪感と基本的信頼の喪失と結び付いていた。例えば、ある対象者は「自覚し始めたのが中学で転校した時…自分のやり方 (人間関係の持ち方) は間違ってたんじゃないかと思った」という気づきを契機としてそれまでの自己像に疑問が生じた。その後、他人と関わるために努力したが、「結構何回も失敗した… (人間関係について) なんでもできないんだろう…自分が情けない」のようにアイデンティティの危機の深刻化が罪悪感につながった。そして、その罪悪感を解消できずにいたために「大学 3, 4 年生ぐらいになると、(自分の理想について) 諦め…自分にそんな価値がない」と自己価値を全面的に否定する基本的信頼の喪失に陥り、「結局こんな (価値がない人間) でいいやって諦め…できないのが自分なんだみたいに思い込むように生きてる」という、全面的に否定的な形で自己を再統合していた。

これに対して、肯定群 4 名全員とバランス群 13 名のうち 9 名が、「受け入れられる人間…期待を裏切らない」など、大人社会で自己が全体的に望ましいという主観的感覚を語った。肯定群 4 名のうち 3 名、 balan

ス群 9 名のうち 6 名が「悩んだり自分だめなんだって思う時もあったけど…そういう時は親が『人間どうにかなるんだよ』って言ってくれて…本当にどうにかなってる」など、他者の援助を得るなどしてアイデンティティ危機に対処しうまく解決していた。他方、肯定群 4 名のうち 1 名、バランス群 9 名のうち 3 名で「(ボランティア活動で) いろんな人傷つけて…すごく挫折をした」などアイデンティティ危機が深刻化していたが、否定群と異なり、「バランス (が大事) なんだろうなと思う…悪い内容の時に、どれだけ自分でコントロールするか」のように否定的要素から肯定的な意味を見出すなどして罪悪感を和らげていた。そして、「自分が役立たずってあんまり思ったことがない」など、自己価値の否定に陥ることなく、否定的・肯定的要素を両方有する人間として自己を再統合していた。バランス群 13 名の残りの 4 名は自己が社会的に望ましくないという主観的感覚について語り、うち 3 名がアイデンティティの危機の深刻化も経験したが、基本的信頼の喪失を経験した者はいなかった。

以上より、否定的アイデンティティ者抽出のための、20 答法の記述および対象者の分類手続きが妥当であることが、量的・質的の両方のデータから支持された。

第 3 章 否定的アイデンティティ者の発達的問題

第 1 節 否定的アイデンティティと問題のある信念の関連

否定的アイデンティティ者が社会に対する問題のある信念を持つのかどうか検討する。二分法的信念、他者に対する皮肉的な敵意であるシニシズム、社会への不信感を指標とする。本研究では、信念の特徴をより深く把握するために、否定的アイデンティティと各指標との個別の関連 (variable-oriented approach) に加え、指標の組み合わせで構成されるプロフィールとの関連 (person-oriented approach) を検討する (西村・櫻井,

2013)。Variable-oriented approach では、先行研究の指摘通り、否定的アイデンティティ者が高い二分法的信念とシニシズム、低い社会への信頼感を示すと予測する。Person-oriented approach では、否定的アイデンティティ者が高い二分法的信念とシニシズム、低い社会への信頼感を持つプロフィールの他に、全ての指標で得点の低い、社会に対して全く関心を示さないプロフィールにも所属しやすいと予測する (Erikson, 1968)。

方法

対象者と手続き 高等教育機関に所属する学生 2313 名 (女性 1641 名; 年齢 18–25 歳, 平均年齢 20.4 歳) がオンラインの調査に参加した。

質問紙構成 20 答法, 二分法的信念 (Oshio, 2009; 5 項目, 6 件法; $\alpha = .82$), シニシズム (Barefoot, Dodge, Peterson, Dahlstrom, & Williams, 1989; 6 項目, 5 件法; $\alpha = .80$), 社会への信頼 (Flanagan & Stout, 2010; 2 項目, 5 件法; $\alpha = .84$) を使用した。

20 答法と対象者の分類 研究 1-1 と同様に 20 答法を分類した ($\kappa = .84$)。肯定群は 22.4%, 否定群は 20.2%, バランス群は 57.4%であった。

結果と考察

Variable-oriented approach アイデンティティの価値の群を独立変数, 二分法的信念, シニシズム, 社会への信頼を従属変数とする分散分析を行った。その結果, 二分法的信念 ($F(2, 2310) = 7.77, p < .001, \eta_p^2 = .01$), シニシズム ($F(2, 2310) = 8.65, p < .001, \eta_p^2 = .01$), 社会への信頼 ($F(2, 2310) = 34.56, p < .001, \eta_p^2 = .03$) でアイデンティティの価値の群の主効果が有意であった。下位検定の結果, 二分法的信念とシニシズムは否定群で最も高く, 社会への信頼は否定群で最も低かった。

Person-oriented approach 潜在プロフィール分析により, 信念の 6 つのプロフィールを抽出した (Figure 1)。アイデンティティの価値の群

と信念のプロフィールの連関を χ^2 分析で検討すると、所属の偏りが有意であり ($\chi^2 (10, N = 2313) = 96.07, p < .001$, Cramer's $V = .14, p < .001$), 否定群の者は高敵意群に所属

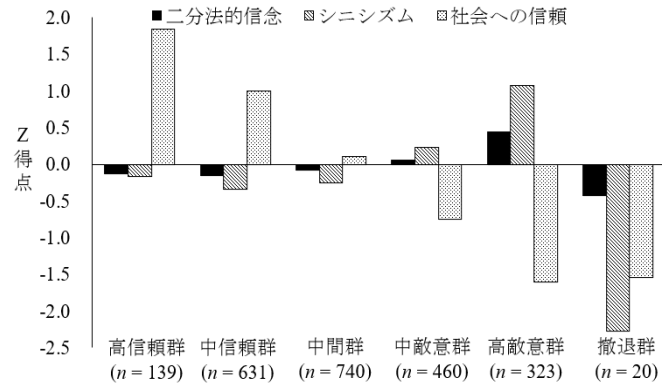


Figure 1. 信念の6プロフィールにおける各指標のZ得点

しやすかった。以上より、否定的アイデンティティ者が社会を「敵と味方」「勝者と敗者」など明確に分割し、社会に対して不信と敵意を向けるといえる。これら問題のある信念は適応を妨げるため (Flanagan & Stout, 2010), 否定的アイデンティティ者は、社会と良好な関係を築くことができず、健全な発達に問題を抱えることが示唆される。

第2節 否定的アイデンティティと不適応の縦断的関連

否定的アイデンティティと不適応の縦断的関連を検討する。不適応の指標として、外在化問題、自殺念慮、ひきこもりへの親和性に着目する。否定的アイデンティティを有することで不適応に陥る方向性と、不適応を示すことが「自分は社会不適合者だ」など自己の否定的要素に繋がり否定的アイデンティティを形成する方向性、つまり双方向の正の影響があると想定される (Gandhi et al., 2017)。

方法

対象者と手続き 研究2の回答者に、6か月間隔で2度追跡調査を行った (計3時点)。2時点以上に回答した916名 (1時点目において女性662名; 年齢18–25歳, 平均年齢20.4歳) を分析対象とした。

質問紙構成 20答法, 外在化問題 (Goodman, 1997; 10項目, 3件法; $\alpha = .66-.69$), 自殺念慮 (Beck, Steer, & Brown, 1996; 1項目, 4件法), ひきこもり親和性 (内閣府, 2010; 4項目, 6件法; $\alpha = .77-.83$) を使用した。

20 答法と対象者の分類 研究 1-1 と同様に分類した ($\kappa = .78-.84$)。3

時点の肯定・否定カテゴリ割合の平均を基に各時点の対象者を分類した。

結果と考察

Figure 2 に示す交差遅延モデルを用いて、3 つの不適応指標について否定的アイデンティティとの縦断的関連を検討した ($\chi^2 (34) = 164.475$, $p < .001$, CFI = .933, RMSEA = .065)。否定的アイデンティティ者かどうかには焦点を当てて分析するため、否定的アイデンティティについて、否定群を 1 (1, 2, 3 時点目でそれぞれ 20.3%, 21.4%, 21.9%), その他を 0 (1, 2, 3 時点目でそれぞれ 79.7%, 78.6%, 78.1%) として分析した。その結果、3 つの不適応指標において、否定的アイデンティティは前の時点の不適応により正に予測されるとともに、後の不適応を正に予測した。否定的アイデンティティを有することが不適応に結びつき、不適応を示すことが否定的アイデンティティにつながる双方向の関連性が示された。

第 4 章 否定的アイデンティティとアイデンティティ形成の取り組み の縦断的関連

否定的アイデンティティ者がアイデンティティ形成にどのように取り組んでいるのかを縦断的に検討する。アイデンティティ形成への取り組み

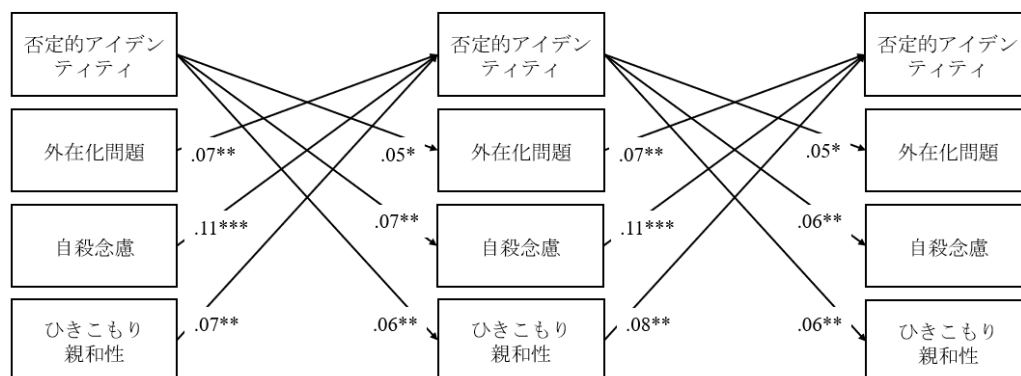


Figure 2. 否定的アイデンティティと不適応の縦断的関連

注) 全てのパスを記載すると煩雑になるため、否定的アイデンティティと不適応の交差のパスの標準化係数 (β) のみを表示している (* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$)。可能な限りモデルを儉約的にするため (Crocetti, Branje, Rubini, Koot, & Meeus, 2014), また測定誤差や平均への回帰の問題に対処し安定的な推定を行うために、2-3時点目の同時点内の相関係数および1-3時点目の交差のパス係数を、異なる時点間で等値にする制約を置いた。3つの不適応指標について、否定的アイデンティティから不適応のパスと、不適応から否定的アイデンティティのパスとの間には、有意な差は存在しなかった。

みとして、将来の生き方に関する選択肢を探す「広い探求」、選択肢を決め傾倒する「コミットメント形成」、現在考えている将来の生き方が真に傾倒に値するかどうか検討する「深い探求」、現在持つ将来の生き方への傾倒を深める「コミットメントとの同一化」、こうした過程で陥る不安の高い反芻的思考である「反芻的探求」を扱った (Luyckx et al., 2008)。

方法

対象者と手続き 研究3と同じ916名を分析対象とした。

質問紙構成 20 答法とアイデンティティ形成への取り組み (Luyckx et al., 2008) を使用した。アイデンティティ形成への取り組みは、コミットメント形成、コミットメントとの同一化、広い探求、深い探求、反芻的探求の5次元から構成される (各5項目、5件法; $\alpha = .81-.89$)。

20 答法と対象者の分類 研究3と同様であった。

結果と考察

1 時点目 (2 時点目) の否定的アイデンティティとアイデンティティ形成への取り組みの5次元を説明変数、2 時点目 (3 時点目) の否定的アイデンティティとアイデンティティ形成への取り組みの5次元を目的変数とする交差遅延モデルを行った ($\chi^2(81) = 176.18, p < .001, CFI = .978, RMSEA = .036$)。否定的アイデンティティ者かどうかには焦点を当てて分析するため、否定群を1、その他を0とした。その結果、コミットメント形成が後の否定的アイデンティティを負に予測し ($\beta = -.09, p < .05$)、否定的アイデンティティは後の深い探求を負に予測した ($\beta = -.06, p < .05$)。将来の生き方を決め傾倒すること (コミットメント形成) が難しい場合に否定的アイデンティティに陥りやすく、否定的アイデンティティを有することは、現在考える将来の生き方が自分に合うのか深く追求しなくなる (深い探求) ことに結び付くと示唆された。

第 5 章 総合的考察

第 1 節 本研究の成果

本研究の成果は 3 点にまとめられる。第一に、これまで理論的にしか検討されてこなかった否定的アイデンティティ者について、抽出手続きを開発し妥当性を示すことで、実証研究を展開していくための素地を整えた点である (研究 1)。第二に、否定的アイデンティティ者が社会を二分法的にとらえつつ敵意と不信を向けること (研究 2)、不適応に陥りやすいことも示した点である (研究 3)。否定的アイデンティティと不適応については双方向の正の予測が認められ、現代日本青年の多様な不適応の理解に否定的アイデンティティの観点が有効であることが示唆された。第三に、アイデンティティの内容の価値 (否定的アイデンティティ) とアイデンティティ形成への取り組み方の関係については、社会に受け入れられる将来の生き方を決め傾倒できないことが否定的アイデンティティにつながることを示した (研究 4)。

従来のアイデンティティ発達に関する実証研究は、アイデンティティ発達上のつまづきを単に自己の肯定的要素の欠如によって定義してきた問題があった (Hoare, 2013)。本研究の一連の結果は、アイデンティティが肯定的要素と否定的要素の両方で構成されるという前提に基づいて得られたものであり、従来の研究では検討が不十分だった否定的アイデンティティに関する知見を補完した点で意義がある。また、アイデンティティの内容の価値の側面を導入して、アイデンティティ形成への取り組み方の検討に偏っていた先行研究の枠組み (Galliher et al., 2017) を拡張し、アイデンティティ発達の包括的理解に示唆を提供した。

第 2 節 本研究の限界と今後の課題

今後の課題として 3 点を挙げる。第一に、本研究の結果の一般化可能

性を検討することである。本研究の対象者は、高等教育機関に所属する青年期後期の日本人学生のみであった。高等教育機関に所属しない若年労働者や、病理的特徴を持つ者、反社会的集団に所属する者、日本人以外の青年、青年期前期や中年期の対象者で再現性を確認する必要がある。特に、本研究で全体的に効果量が小さかった理由として、比較的健全な青年を対象としていたことが考えられるため、サンプルを拡張することは重要である。第二に、不適応の指標を他者評定により測定することである。本研究で用いた不適応の指標は、全て対象者の自己評定で測定された。否定的アイデンティティ者が否定的な人間として承認されようと自身の否定的要素を他人に示す可能性があること、および他者評定による測定がアイデンティティ発達研究で重視されている現状 (Crocetti et al., 2017) を踏まえれば、他者評定を取り入れた客観的な測定が必要である。第三に、対象者の生育歴や心理力動、青年期以前の発達の危機への取り組み方を詳細に検討することである。研究4では、アイデンティティ形成への取り組みとアイデンティティの内容の価値の関連性を検討することで、否定的アイデンティティ形成のプロセスの一端を明らかにした。しかし、個人がどのように社会の期待を拒絶し、望ましくない生き方を選び取るのかはわからない。否定的アイデンティティ者が自己と社会の期待をどのように統合したのかを語りのアプローチにより把握するなど (McLean & Syed, 2015a), 心理力動を詳細に検討する必要がある。

引用文献

安達 智子 (2008). 女子学生のキャリア意識：就業動機、キャリア探索との関連 心理学研究, 79, 27-34.

Barefoot, J. C., Dodge, K. A., Peterson, B. L., Dahlstrom, W. G., & Williams, R. B. Jr. (1989). The Cook-Medley hostility scale: Item content and

- ability to predict survival. *Psychosomatic Medicine*, 51, 46-57.
- Beck, A. T., Steer, R.A., & Brown, G. K. (1996). *Manual for the Beck Depression Inventory-II*. San Antonio, TX: Psychological Corporation.
- Berman, S. L., You, Y., Schwartz, S. J., Teo, G., & Mochizuki, K. (2011). Identity exploration, commitment, and distress: A cross national investigation in China, Taiwan, Japan, and the United States. *Child & Youth Care Forum*, 40, 65-75.
- Bogaerts, A., Claes, L., Schwartz, S. J., Becht, A. I., Verschueren, M., Gandhi, A., & Luyckx, K. (2019). Identity structure and processes in adolescence: Examining the directionality of between- and within-person associations. *Journal of Youth and Adolescence*, 48, 891-907.
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3, 77-101.
- Chandler, M. J., & Proulx, T. (2006). Changing selves in changing worlds: Youth suicide on the fault-lines of colliding cultures. *Achieves of Suicide Research*, 10, 125-140.
- Crocetti, E., Branje, S., Rubini, M., Koot, H. M., & Meeus, W. (2017). Identity processes and parent-child and sibling relationships in adolescence: A five-wave multi informant longitudinal study. *Child Development*, 88, 210-228.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York, NY: Norton.
- Flanagan, C. A., & Stout, M. (2010). Developmental patterns of social trust between early and late adolescence: Age and school climate effects. *Journal of Research on Adolescence*, 20, 748-773.
- 福島 章 (1979). 対抗同一性 金剛出版

- Gallagher, R. V., McLean, K. C., & Syed, M. (2017). An integrated developmental model for studying identity content in context. *Developmental Psychology, 53*, 2011-2022.
- Gandhi, A., Luyckx, K., Maitra, S., Kiekens, K., Verschueren, M., & Claes, L. (2017). Directionality of effects between non-suicidal self-injury and identity formation: A prospective study in adolescents. *Personality and Individual Differences, 109*, 124-129.
- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 38*, 581-586.
- Hatano, K., & Sugimura, K. (2017). Is adolescence a period of identity formation for all youth? Insights from a four-wave longitudinal study of identity dynamics in Japan. *Developmental Psychology, 53*, 2113-2126.
- Hoare, C. (2013). Three missing dimensions in contemporary studies of identity: The unconscious, negative attribute, and society. *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology, 33*, 51 –67.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitude. *American Sociological Review, 19*, 68-76.
- Lewis Arango, L., Kurtines, W. M., Montgomery, M. J., & Ritchie, R. (2008). A multi-stage longitudinal comparative design stage II evaluation of the changing lives program: The life course inventory (RDA-LCI). *Journal of Adolescent Research, 23*, 310-341.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality, 42*, 58-82.

- McLean, K. C., & Syed, M. (2015a). Personal, master, and alternative narratives: An integrative framework for understanding identity development in context. *Human Development, 58*, 318-349.
- McLean, K. C., & Syed, M. (2015b). The field of identity development needs an identity: An introduction to the handbook of identity development. In K. C. McLean & M. Syed (Eds.), *The Oxford handbook of identity development* (pp. 1-10). New York, NY: Oxford University Press.
- Meeus, W. (2018). The identity status continuum revisited: A comparison of longitudinal findings with Marcia's model and dual cycle models. *European Psychologist, 23*, 289-299.
- 三好 昭子 (2014). 全体主義が青年に及ぼす影響：否定的アイデンティティの観点から 帝京大学短期大学紀要, 34, 89-100.
- Montgomery, M. J., Hernandez, L., & Ferrer-Wreder, L. (2008). Identity development and intervention studies: The right time for marriage? *Identity, 8*, 173-182.
- 村山 恭朗・伊藤 大幸・浜田 恵・中島 俊思・野田 航・片桐 正敏…辻井 正次 (2015). いじめ加害・被害と内在化/外在化問題との関連性 発達心理学研究, 26, 13-22.
- 内閣府 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) 内閣府ひきこもり調査 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html (2019年6月23日)
- 西村 多久磨・櫻井 茂男 (2013). 中学生における自律的動機づけと学業適応との関連 心理学研究, 84, 365-375.
- 大西 将史 (2008). 青年期における特性罪悪感の構造：罪悪感の概念整

理と精神分析理論に依拠した新たな特性罪悪感尺度の作成 パーソ
ナリティ研究, 16, 171-184.

Osche, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1240-1252.

Oshio, A. (2009). Development and validation of the Dichotomous Thinking Inventory. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 37, 729-742.

Rhee, E., Uleman, J. S., Lee, H. K., & Roman, R. J. (1995). Spontaneous self-descriptions and ethnic identities in individualistic and collectivistic cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 142-152.

下山 晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.

Silverstein, R. (1994). Chronic identity diffusion in traumatized combat veterans. *Social Behavior and Personality*, 22, 69-80.

Solomontos-Kountouri, O., & Hatzitofi, P. (2016). Brief report: Past, present, emergent and future identities of young inmates. *Journal of Adolescence*, 47, 119-124.

Way, N., & Rogers, L. O. (2015). "[T] hey say black men won't make it, but I know I 'm gonna make it": Ethnic and racial identity development in the context of cultural stereotypes. In K. C. McLean & M. Syed (Eds.), *The Oxford handbook of identity development* (pp. 269-285). New York, NY: Oxford University Press.

山田 昌弘 (2004). 希望格差社会: 「負け組」の絶望感が日本を引き裂く
筑摩書房